

### ③ 肝細胞がんの治療

#### 4. 抗癌剤治療(分子標的薬)

肝細胞癌に効果的な点滴や内服の抗癌剤は、2009年までありませんでした。

2009年にソラフェニブ（ネクサバル®）という薬が承認され、手術・ラジオ波焼灼療法、肝動脈塞栓術などができなくなった患者さんを治療できるようになりました。

その後も薬剤の開発は進み、現在では4剤の薬物が承認されています。それぞれ、使い方に特徴があります。主治医と相談して薬剤の選択をします。

## 肝細胞癌の分子標的薬(TKI)

**2009年5月 Sorafenib(ネクサバル)**

**2017年6月 Regorafenib(スチバーガー/ \* 2nd regimenとして)**

**2018年4月 Lenvatinib(レンビマ)**

**2019年6月 Ramucirumab(サイラムザ/ \* 2nd regimen  
AFP>400)**

当院で治療している肝細胞癌、多発骨転移の患者さんです。

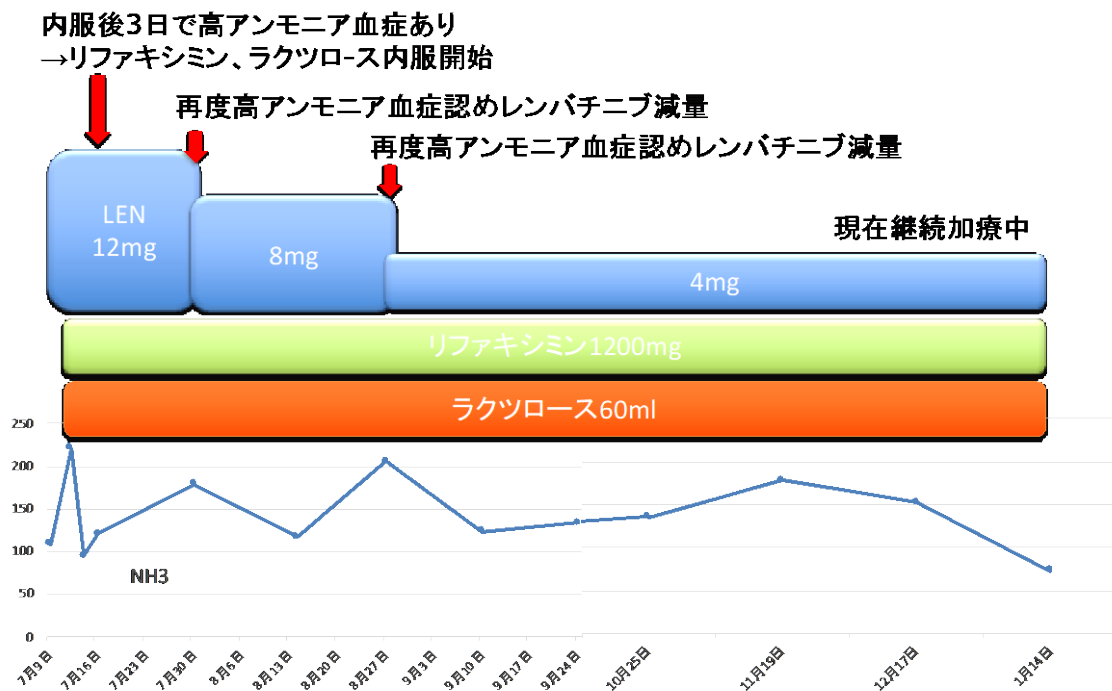
レンバチニブ（レンビマ®）という薬剤で治療しました（放射線治療も併用）。

当初、腰椎への骨転移による強い腰痛、坐骨神経痛がありましたが、この治療で

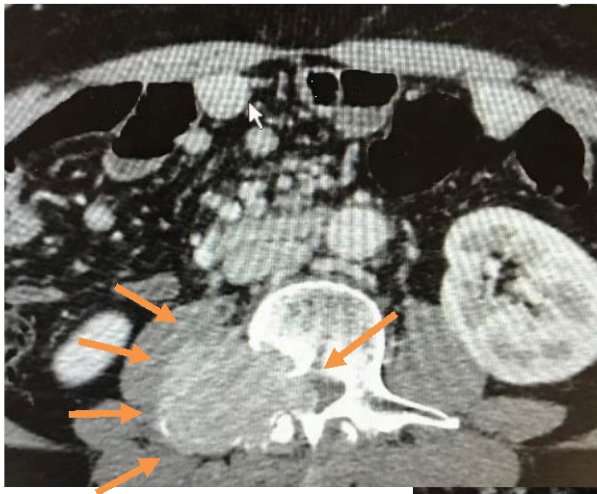
癌は縮小し痛みも軽快しています。途中、高アンモニア血症などの合併症はあり

ましたが、薬剤の追加により抗癌剤は中止せずに継続治療できました。

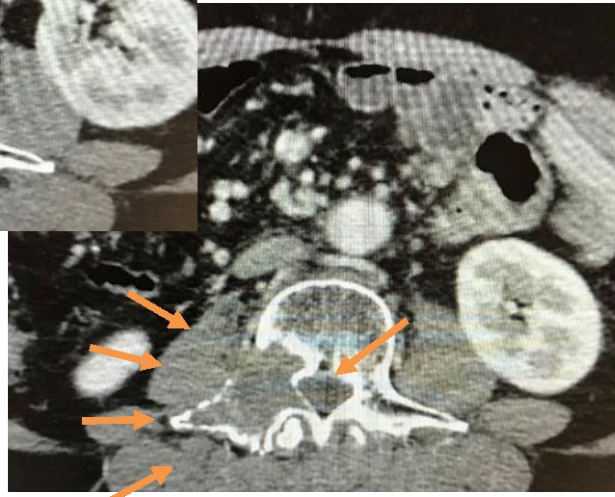
## 症例(骨転移)



治療前



6か月後



第3腰椎(L3)転移

腰痛、坐骨神経痛認め  
るも放射線+LEN  
で縮小し疼痛消失

また、2021年にはノーベル医学賞で話題になった免疫チェックポイント阻害薬が肝細胞癌に適用承認される予定です。臨床試験では、非常に高い効果を示しており、今後の治療の1つとして大変期待されています。